

原発ゼロ
の夏へ

原発は仏の道とあいられない



妙心寺法堂を背景に
大方丈にて
(撮影・編集部)

河野太通

こうの・たいつう 僧侶。一九三〇年生まれ。臨
濟宗妙心寺派管長。全日本仏教会前会長。著書に
『床の間の禅語』(御文化研究所)『闘う仏教』(共著、
春秋社)『不二の妙道を行く』(春秋社)など多数。

過ちへの反省から出発を

仏教者として発言をしなければ

「昨年の原発事故を受けて、河野先生は日本の主要な仏教団
が加盟する全日本仏教会の会長(当時)として、昨年八月、事故の被
害を受けている方々に思いを馳せられつつ、原子力発電による「便
利な生活」によって「誰かがそのために犠牲になっているか」を、今
一人ひとりが責任をもって考え、二度とこのような事故を繰り返さ
ないためにも、私どもの日々の生活を見つめなおさなければならな
い」と述べられました。この中で、先生が管長をつとめておられる臨
濟宗妙心寺派として九月、脱原発を求める声明を出し、さらに全日
本仏教会(全日仏)として二月、「原子力発電によらない生き方を
求めて」という宣言を出しております。本日は、こうした声明を出
された経過や先生のお考えをお聞かせください。

として参加し、釈尊の「憎悪は憎悪によって止むことはなく、
憎悪なき心によって止む」(『法句経』第五番)という言葉を用
いて日本への賠償権を放棄されたことがあった。私はこの
ことの感謝と共に、日本があつた戦争でアジア諸国に対し非常
な苦痛を与えたことへの懺悔と反省を述べたうえで、法句経
第一二九番の「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死
をおそれる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さ
しめてはならぬ」という釈尊の教えに従い、セイロンも世界
平和の道を開かれることを願った。

同じ頃に、日本の栃木で日本仏教徒会議がありました。そ
の時分、臓器移植法の改正がありました。この問題を仏教者
としてどう考えるか、討議する場はあったのですが、結果と
して仏教界として意見を出すようなことはないうまま終わら
した。生命観にかかわる問題が、国会で満足に議論もされて
いない。本人の意思表示がなくとも遺族の同意があれば臓器
の摘出ができる、それも、年端もいかない人の臓器も摘出で
きるという法律に変えられた。摘出される人の人権をどう見
るのか。私は脳の「死」をもって生命の死とすることを疑問
に思っておるのですが、こうしたことに仏教界が何の意見も
言わずにいていいのかという思いがありました。

そこに東日本大震災があり、原発事故が起きたのです。現
在も数万人以上の人々が故郷に帰れないままです。それ
で、まず会長談話として原発によらない生活の創造を世に

「私はいわば因縁ですね。私は二年前にここ(臨濟宗妙心寺派)の
管長になったのですが、なってみたら今度は全日仏の会長に
なれど。これは伝統仏教団の管長が持ち回りで受け持つこ
とになっているから断れない引き受けたら、東日本大震災
が起き、原発事故で生命と生活権にかかわる大変な被害があ
った。仏教者として沈黙しているわけにはいかないと思いま
した。」

私は、仏の教えの基本は生命の尊厳と人権の尊重だと言っ
てきました。震災の前年の十一月、世界仏教徒会議がスリラ
ンカで開かれた時、スリランカにおけるタミル人とシンハリ
人の紛争のことを念頭に置いてスピーチしました。スリラン
カのジャヤワルダナ大統領(在職一九七八〜八九年)は、サンフ
ランシスコ講和条約の当時蔵相であられたが、セイロン代表
問いました。それから妙心寺派の脱原発声明になり、その後
に全日仏として宣言を出しました。

時代の都合で変わらない生き方を求めて

「先生は、全日仏の声明にあるように、『誰かの犠牲の上に成り
立つ豊かさを願うのではなく、個人の幸福が人類の福祉と調和する
道を選ばなければなりません』と主張しておられます。こうしたお
考えと脱原発、あるいは過去の戦争を反省する姿勢は一体のものな
のでしょうか。」

私が生まれた年の翌年、満州事変が起こります。戦争が終
わったのが旧制中学四年の時で一五歳です。まさに一五年戦
争の中で私は成長し、軍国少年に育った私は、国家というの
はずっと戦争をしているものと思ひ、私もいずれは国家のた
めに命を捧げることが生きがいになっていました。同じ世代の
者は、多かれ少なかれ同じような思いをしていました。

その国家は消滅してしまつた。私の生きがいも消滅した。
これからどう生きていけばいいのか、誰しも迷いの中にあつ
て、学校に反抗して窓ガラスを破ってみたり、ストライキを

してみたり、やり場のない憤りが充満していました。同じ思いを持つ友人たちと議論をするなかで、自分たちが育てられた教育が軍国主義教育であったと知るわけです。自分たちはそのような「主義」によって育てられた。そして、今度は民主主義というものが正しいという世の中に変ったわけです。

戦争中に一番、我々の尻を叩いて軍国主義を叩き込んだ先生が、「これからは民主主義の時代だ」と言って、リンカーンの言葉を「ガバメント オブ ザ ピープル……」なんて英語で説く。その先生は戦争中、「戦争に勝てばアメリカ人も日本語を話すようになる」なんて言っていた。それで、教師を、大人を、信用できなくなった。

その先生はただその時代に置かれた立場、いわば都合があった、「英語なんて必要ない」と言っていたにすぎない。だから、また都合が悪くなればこの先生はまた言うことが変わるのではないか。先生の中には「やがて社会主義の世の中になり、共産主義になっていく」と言う人もいる。そのうちレッドパージが始まり、私たちが親しくしていた先生が「共産主義者だ」ということで教職から追放されてしまった。また世の中が変わるのか、時代に翻弄されない生き方というものがあるのか、考えました。

私は父が早死にしてから、母方の祖父がいた鎌倉で育ったのです。祖父は鶴岡八幡宮の氏子総代をしていたり、建長寺の檀家総代もしていたので、雲水さんたちが托鉢の帰りに家

い」と励まして送り出した、そのことへの慙愧の念、痛切な反省の念が、市川先生の教えの中核をなしていました。自らの反省の上に、仏教教団への批判がある。重い授業でした。もう一つ、自分にとって衝撃だったことがあります。九州

の寺で、在家の方が自分の寺の和尚さんのことを「隊長、隊長」と呼んでいるのです。いったい何のことだと思っていたら、戦争中、和尚さんも兵隊として戦争に行っていて、その在家の方は部下だったのです。

仏教というのは、ことさらに人命の尊重ということを読む宗旨であるのです。人間のみならず、釈尊の、動物や一木一草に到るまでの生命の平等の自覚から出発した教えです。それを説く仏教僧が、生命を奪う鉄砲を担いで戦争に加わっていた。衝撃でした。私は一命を国家のために捧げるといふ生きがいと奪われ、生命を尊重する生き方を求めて仏の道に身を投じた。ところが、その仏教団が戦争に加担し、若者たちの尻を叩いていた。私は僧になることを迷いました。

その迷いは長く続きました。大学を出た後、他の道に進むことも考えていなかったから、専門道場に入らずと座禅修行をしていた。座禅が生きていることの追求になっていた。仏教の大学を出て長く修行をしているから、周囲の人はみな私を坊さんになるものだと思っているし、いずれ寺の住職になると期待するのですが、私自身はそういうつもりは全くない。過ちを過去に行っている、その教団の一員になろうという

に寄り食事をしていく。子ども心に、不思議な人たちだなど食事をする時には音も立てずにお経だけ読んで食べて、肅々とわらじを履いて去っていく。食器を見ると洗った後みたい綺麗になっている。小学校では、元寇の役(げんこう)の時に北条時宗が無学祖元という禅師に建長寺で参禅して胆力を練り、その胆力によって元の大軍を押し返したのだと、そんなことを担任の先生が講談調よろしく聞かせてくれる。俺も座禅をして国難を救うような立派な人間にならなきゃいかんなど子ども心に思った。そんなことが下敷きにあって、生きる道に悩み苦しんだ末に、座禅がしたくなったのだと思います。

縁があつて九州の禅寺の小僧にしてみました。私は高校を卒業したら普通の大学に進むつもりだったのですが、貧乏な寺で、大学なんてとても行かせられない。当時はどの寺も貧乏でしたから。ただ、宗門の大学なら学費は安いから、そこならいい。それで私は花園大学に進み、そこで市川白弦先生や山田無文老師に出会う。このお二人との出会いがあつて、今日の私があります。

仏教者の戦争責任

市川先生は仏教近代思想史という講座を持っておられたと思うのですが、先生は学生たちに仏教者の戦争責任について語られておった。それは、戦時中に仏教者として教え子たちを戦場へと送り出したことへの反省、それも「頑張つてこ

思いは私にはなかった。しかし、山田無文老師の講義、市川先生の講義を受けていて、戦争に協力した教団が誤ったのであるならば、私が教団から出ていくのではなく、教団が過ちを正すべきなのではないか。そう思うようになりました。

戦後五〇年の時には、私は柄にもなく花園大学の学長をしておりました。妙心寺派を再興された日峰禅師という方の四五〇年遠諱がこの年にあたり、その記念講演をやれと宗門から話が(か)あつた。当時、各界で戦後五〇年の総括をする社会的機運が盛り上がりつつありました。私は、宗門も、遅きに失したけれども、戦争加担は間違いないと懺悔表明をするべきだと思ひ、そのような講話をしたのです。

四五〇年遠諱で戦後五〇年を迎えたということは、四〇〇年の遠諱は一九四五年、終戦の年の春を迎えているわけで、その時に宗門は、何遍も言うのは恥ずかしいのだけれども、軍部からの要請に応じて戦闘機を二機、全国の檀信徒からお金を集めて「献納」しているのです。そうした過去をきちんと懺悔しなければ、生命を大事にしようなどどうして言えるか、そういう講話をしたわけです。

宗門としての公式の懺悔表明は、それから七年かかりましたが、二〇〇二年に行なわれました。

生命の尊厳と原発はあいられない

——そうした戦争への反省があつての脱原発宣言なのですね。

そうです。私は、原発の問題も戦争の問題も同じだと思うのです。国策だと言っても、みんなが良しと思っていたわけでは決していない。一握りだったけれども、勇気をもって警告し反対していた人たちがいた。しかし、それが多くの声にならず、大きな流れを作れずに破局へと向かっていく。その点で原発と戦争には同じ流れがあります。

仏の教えから見た時に、原子力発電はどういうものなのか。いま、事故を起こした後の始末を誰がやっていますか。大変に危険な作業です。原子力を推進してきた人たちがその作業をしているのかといえば、そうではない。それは差別なのではないか。

原発の再稼働という声も聞こえてきます。これほどの被害を目の当たりにして、再稼働など考えられないことです。根本的に、反省が足りない。原発の危険性はもう誰かが分かっているはずなのに、それを再び「世界最高水準の安全性」などと言って再稼働させようとしている。原子力発電で利潤を生んできた歯車を再び回そうとしているのです。

原子力発電所を一基つくるのに五〇〇億円かかると言いますが、ある時期から毎年つくってきた。そしていつの間にか全国に五四基もある。そして始末に負えぬ負の遺産を大量に残していくのに、「世界最高水準の安全性」だと言う。

特に、原子力発電の推進にかかわった科学者たちに反省を求めたい。これほどの危険性があることが分かっているが、

いている人たちの意欲と能力を、そういう、みんなが喜んで子孫のためにもなることのために使ってもらわないといけない。今回の事故の反省から出発して、世界一の自然エネルギーの国にする。そうなればいいと思います。

——先生のように社会的な発言をするのは勇気が必要なのではありませんか。若い仏教者の方々はどうか。

生命の尊厳と人権の尊重という仏の教えの基本理念を、仏の道に入る若者はしっかりと腹に据えてほしい。何より、勇気をもって発言と行動をしてほしい。戦時中だけではなく、今でも立場の都合で本当のことを言わなくなる人はいくらでもあります。

世間には言いたいことも言えない人はいっぱいいる。お勤めの人は大変です。上役の目もある。家族も養わないといけない。一番都合を気にしないでいい仏教者がはつきりものを言うべきである。何を気にかけることがあるか。国法に触れる悪事を犯さないかぎり、住職になればずっと住職だ(笑)。生命と人権を守るために、正しいことを言うために、住職というものがいるのだと思ってほしい。

——原発の再稼働に反対する世論が広がっていますが、一方で「江戸時代に戻るのか」とか、「真っ暗な中で生活するわけにはいかない」という政治家もいます。

真っ暗はおどかしですが、私なんかは少々暗くても大丈夫ですな。なにしろ戦争中は灯火管制で真っ暗でしたからな。

黙して推進にかかわってきた。懺悔すべきではないか。

原子力発電というのは核発電です。ウランを燃やして電気を生み出す。一トンのウランを使って電気を作れば、あとには同量の、すさまじい放射能を帯びた汚染物が残る。これを無害無毒にする技術を人類は持っていない。絶対に無害にできない膨大な汚染物質が既にできてしまっていて、日本全国、あちこちに置かれている。そのどこが「安全」なのか。事故によって未来にわたる大量の汚染物質という負の遺産を子孫に残していく。それがわかっていながら、まだ原発を動かそうという。人間の欲望というのは恐ろしいものです。

誰でも幸福になることを願います。そのために経済的利益を追求するのですが、それがわが身だけのものであるなら、必ず破綻する。個人の幸福の追求は社会全体の利益になるものでなければならぬのではないですか。

原発に反対する声が広がっていると、今度は「電気代を値上げする」と言う。原発をやったほうが得だと。損だとか得だとか、そんな問題ではないのだけれども、それにしても、原発を実際に五四基も作ってきて、それで電気代が安くなっていたのかといえば、事故前だって国際的に見て安かったわけではない。むしろ高い。

原発をつくる金や、「安全」にするために何千億円もかけるといふのであれば、それを再生可能な自然エネルギーの開発と研究と普及に使ったほうが良いでしょう。東京電力で働

原発を再稼働させなかったところで「真っ暗」になりはしないでしょうが、むしろ、昼間から電灯を煌々とつけている現在のほうが異常なのです。

原子力発電というものの恐ろしさを知らずに、電気を使い放題に使ってきた私たちがまず、反省をしていかなければなりません。江戸時代には戻らないにしても、なんぼか始末した、質素な生活になったほうがいいのではないかと思います。仏教で言うところの「足るを知る」です。

——本日はありがたいお話を聞かせていただきました。

【聞き手 本誌編集部・熊谷伸一郎】

岩波ブックレット

検証 大阪の教育改革

——いま、何が起きているのか——

志水宏吉

定価505円(税込)

大阪維新の会が府議会に提出した「教育基本条例案」の何が問題なのか。それが登場してきた思想的・現実的な背景は。各地への波及はあるのか。大阪の教育学者が条例を批判的に読み解き、真の「格差を超える教育」を考える。

岩波書店